



写真1. 市村塘が明治24年に採集した  
ハクサンボウフウの標本



写真2. 白山に隔離分布することが2014年に論文発表された  
ホザキシオガマの標本（里見信生が1967年に採集）

## 第19回企画展 「白山の植物 –白山の高山植物研究史–」の開催

【場所】 県立自然史資料館 2F企画展示室 【期間】 平成27年7月4日(土)～12月6日(日)まで

白山の植物には名前にハクサンとつく植物が多いことからもうかがえるように、白山では古くから植物研究の歴史があります。本展示のために近世史料館より借用した畔田伴存著『白山草木志』（文政5年）には、87種類の植物の名前が短い解説とともにあげられています。明治時代には、市村塘（第四高等学校）が『加州白山及其附近採集植物目録』（明治32年）という白山産の植物目録第一号となる論文を発表しました。植物目録は、ある地域に生える植物の種類（植物相）を全て記述した総目録のことで、植物研究の基礎資料として不可欠なものです。古い年代の文献は、往時の植物相を探るうえで重要な記録です。

『白山草木志』や『加州白山及其附近採集植物目録』では、カラマツやコケリンドウなど、今の白山には発見できない植物種が記されています。これらについて、これまで採集標本は存在しませんし、現在に至るまで白山での自

生が確認されていません。間違えようのない種類ですから、同定誤りとは考えにくいのではないのでしょうか。つまり、これらは白山から絶滅したのかもしれませんが。

1970年代頃から、標本を引用したり、証拠標本を残したりする植物目録が出版されるようになってきました。白山の植物についても、証拠標本で裏付けられた植物目録が作成されたり、調査が不十分な種類や地域について重点的に調査が行われたりしました。その結果、文献上でのみ存在が記されていた植物種のいくつかは発見されました。例えば、チシマゼキショウやトウヤクリンドウなどがそうです。

今回の企画展では、植物目録第一号を発表した市村塘の明治時代の採集標本（写真1）や、白山自然保護センターより借用したチシマゼキショウ「再」発見の証拠標本などの重要な白山産植物標本に加えて、白山の植物相解

明の流れを追う一連の文献を揃えました。研究史をひもとくと、白山の古い歴史の割には、植物相関係の文献は意外に少ないと感じられると思います。白山の広い範囲を対象として、標本採集を行ったり、既存の標本を調査することは、多くの時間と人手がかかる困難な仕事であるからでしょう。いまだ白山の包括的な植物目録が完成しないうちに、白山から姿を消した植物は多いのではないかと危惧されます。

言い換えれば、白山からは今まで知られていなかった植物が新たに見つかるかもしれません。実際、白山は固

有種がないとされていましたが、1997年に三ノ峰を基準産地とする新種のエチゼンオニアザミが記載されました。また、今まで発表された植物目録には掲載されていないコヒナリンドウなどの新産植物も発見されています。ホザキシオガマは、最近白山での隔離分布について論文発表された種ですが、資料館の未同定標本の中からも1967年に採集されたホザキシオガマの標本が見つかりました(写真2)。白山の貴重な植物を守っていくために、採集や標本調査を進め、より正確な植物目録を作成することが急がれます。(中野真理子)

## 自然史資料館の標本資料の紹介 一甲殻類(エビ・カニの仲間)一

自然史資料館の液浸標本収蔵庫(図1)に保管されている十脚甲殻類(いわゆるエビ、カニとヤドカリ類)の標本には、古くは1960年代に採集されたものがかなり多くあります。そして、今日に至るまで、年々新たな標本が追加されているのが実態です。これらの中で最も古いものは、金沢大学から移管されて当館にやってきた石川県沖産の標本であり、それらは今では“貴重な証拠品”となっています。

これらの甲殻類標本は、総数で200点以上に上ります。そして、そのほとんどは石川県の浅海・沖合域で得られたものです。それらの中には、今日では採捕がとても難しいものも含まれています。一方、数十年前には得ることがほとんど不可能だったのに、近頃では時折採集されるようになった暖海性の種類もあります。その一例としてあげられるのがメガネカラッパ(図2)です。近年、石川県近海で得られる種類の特徴として、いわゆる“南方系種”の増加があります。このメガネカラッパも暖海性のカニで、数

十年前には本県海域ではほとんど見る事のなかった甲羅の大きさが8 cm以上にもなる大型種です。ですが、近年、時には「あー、又か!」といった感じでよく見つかります。この要因としては、海洋生物学的にはその因果関係は完全に判ってはいないものの、いわゆる近年の“温暖化”によることが十分に予想されます。

目下、エビ・カニ類標本のほとんどは、75%エタノール(エチルアルコール)溶液中で“液浸標本”として、そして一部の大型個体は“乾燥標本”として、収蔵庫に保管されています。乾燥標本は高価な保存瓶や保存液が要らず、場所もとらないので安上がりかつ取扱簡便です。しかし、これは、後日必要に応じて解剖などして内部(例えば生殖器)などを調べることに不向きなので、学術的には推奨できません。一方、エタノールによる保存は、標本の柔軟性を保つことができる、有用性の高い保存方法です。

(本尾 洋 日本海甲殻類研究会)



図1 液浸標本収蔵庫に保管されている甲殻類標本



図2 石川県近海で採捕されたメガネカラッパ

## 自然史に関する質問を受け付けています

博物館には、「レファレンスサービス」があり、質問すれば、関連する分野について様々な情報を得ることができます。自然史資料館でも、動植物の種類や化石の鑑定、それらの標本の作り方、県内に生息する生き物の分布や生息状況など、県民の方からの自然史全般に関する質問を受け付けており、随時これに対応しています。

最も多いのは、「これ(動物 or 植物 or 化石)は、なんという種類ですか?」という質問です。動物では、昆虫や哺乳類・カエルやクモなどに関する質問が多く寄せられます。植物では、身近な園芸植物や最近目につくようになった外来植物に関する質問が多いようです。

化石では、犀川や浅野川などで見つかる大桑層産の化石に関する質問が多いですが、他にも山の中などで拾った石や鉱物に関する問い合わせもあります。

ご質問は、電話(076-229-3450)またはHPの「自然史に関する質問(Q&A)」コーナーのメールフォームより、お気軽にお寄せください。お待ちしております。

(嶋田敬介)



資料館に持ち込まれたアリ(種類はケアリ属の一種)



資料館に持ち込まれたオタマジャクシ(種類はウシガエル)

## 学校地域支援活動 一団体利用プログラムの更なる活用を!!



学校地域支援活動では、今年度の団体利用プログラムとして、「かんたん工作教室」・「体験講座」・「フィールド講座」の3講座、合計14プログラムを設定しています。

今年度の特徴として、「葉脈しおり」や「植物図鑑づくり」など植物分野の利用が増えています。このほか、水生

昆虫や浅野川の魚類観察が周辺小学校の総合学習やサマースクールで活用されており、実施校の評判も良く、ありがたく思っております。地質分野では、東京都国立市のサイエンス倶楽部が大桑層の化石採集にみえられました。犀川河床の連続した地層の観察とそこから産出する化石の標本作りなどを体験して帰られました。東京都内での化石採集は難しいため、毎年各地を訪問しているそうです。犀川河床の大桑層での化石の講座は希望される学校が多いので、今後も積極的に取り組んでいきたいと考えています。

前期を終了し、皆様には充実した活動を体験していただけたものと思っております。後期は、野外で行うフィールド講座は実施できませんが、室内で楽しく学べる工作教室・体験講座を通して、自然の不思議や科学のおもしろさを感じてほしいものです。(北村栄一)

## 10月～3月の講座・イベント情報

第19回 企画展 「白山の植物 ー白山の高山植物研究史ー」  
会期:12月6日(日)まで

2月 ■ 13日(土)里山の動物 足跡探検  
10:00~12:00/館外/小4~大人/20名/1月13日より申込開始

10月 ■ 17日(土)魚の解剖講座 ー動物のからだのつくりを学ぼうー  
13:30~15:30/館内/小3~中3/16名/9月17日より申込開始

3月 ■ 6日(日)自然史講演会 「多様な能登の魚」  
14:00~16:00/館内/どなたでも/100名/申込不要

12月 ■ 6日(日)葉脈標本&クリスマスカードをつくろう  
10:00~12:00/館内/小1~小6/16名/11月6日より申込開始

第20回 企画展 「日本海の生きものと環境 ー鯨・魚・蟹・海老・烏賊・貝ほかー」  
会期:2016年1月16日(土)~5月29日(日)まで



■ 表記は、実施時間/活動場所/対象/定員/申込期間の順です。

■ 電話でお申し込みください。

■ 詳細は当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

■ 申込  
TEL 076-229-3450

■ 当館HP  
<http://www.n-museum-ishikawa.or.jp/>



# 第20回企画展 「日本海の生きものと環境 一 鯨・魚・蟹・海老・烏賊・貝ほか」

【場所】 県立自然史資料館 2F企画展示室 【期間】 平成28年1月16日(土)～5月29日(日)まで

日本海は、四季折々の豊かな海の幸をもたらし、北陸に住む私達の暮らしや文化を育んできました。南北に長い日本海は、対馬暖流と日本海固有水を有し、南方では暖水系の生物が、北方では冷水系の生物がみられます。また、生息環境をみても、沿岸に住みついている種類や、深海部に生息する種類、また海流に乗って回遊する種類など、様々な生き物がみられます。

例えば、外洋域で見られる代表的な生き物としてクジラ類が挙げられ、ナガスクジラやミンククジラ、オウギハクジラ・コククジラ・カマイルカなど20種類以上が知られています。また、魚類では、ブリ・マダラ・アカムツ(ノドグロ)・ハタハタ・メバル・クロマグロなどが代表的なものとして挙げられ、海の幸として私達の食卓を日々賑わせてくれます。

海の中を見てみると、水深200～350mには、日本海の冬の味覚の代表であるズワイガニが、水深400m以下にはベニズワイガニが生息しています。また、ホッコクアカエビ(甘エビ)や、オオエッチュウバイ・カガバイなどの貝類もみられ、これらも北陸近海に特徴的な生き物と言えるでしょう。他にも、

リュウグウノツカイやダイオウイカなどの深海生物が日本海沿岸で捕獲されたり、砂浜に打ち上げられたりする例も少なくなく、最近ではニュースに頻繁に取り上げられるようになりました。

本企画展では、私たちの食卓を彩るエビ・カニや魚・貝から、日本海を泳ぐ巨大なクジラや発見されて人々を驚かせる深海生物までを幅広く取り上げ、それらの骨格標本や液浸標本を中心に展示し、日本海の生物相とそれを育む環境について解説します。

(嶋田敬介)



## 利用案内

■ 開館時間：午前9時～午後5時  
(入館は4時30分まで)

■ 入館料：無 料

■ 休館日：12月29日～1月3日

■ 駐車場：完 備  
(大型バス駐車可)

## 交通案内



## 周辺地図(拡大)



### 【バスをご利用の場合】 金沢駅東口バスターミナル

- 6番乗り場 『95 北陸大学太陽が丘ゆき』または『95 北陸大学薬学部ゆき』  
→【北陸大太陽が丘下車】→徒歩約10分
- 7番乗り場 『12 湯涌温泉ゆき』または『12 北陸大学薬学部ゆき』  
→【銚子口下車】→徒歩約10分  
『12 北陸大学太陽が丘ゆき』→【北陸大太陽が丘下車】→徒歩約10分

